説教要旨『低くされて、高められる』

ルカによる福音書 14 章 7～14 節

「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。『わたしはＡであり、Ωである』」（ヨハネ黙示録1:8）。「Ａ」と「Ω」は、ギリシャ語アルファベットの最初と最後の文字です。聖書は「神」を示すために、「初め」と「終わり」を読者に思い出させようとしています。「初め」と「終わり」と聞いてすぐに思い出されるのは、「生まれる時」と「死ぬ時」でしょうか。命の誕生や死の場面に直面するとき、私たちは、人間の計画や知恵や力ではどうにも支配できない現実があることに改めて気づかされ、人間の分際を知り、低くされていきます。それは同時に、全能者なる神の存在に思い深くする時にもなっていきます。

本日の聖書箇所で、イエスは、招待された客が上席を選ぶ様子を見て、末席に座るよう勧めています。自分より身分の高い人が招かれたときに恥をかくことになるし、誰かに勧められてから上席につく方が面目を施すことになるからだとしています（7-10節）。また、招待する者の側に対しては、「お返しができない人」を招くようにと勧めています。それによって、かえって報われ、幸いになるからだといいます（12-14節）。では、ただイエスの言われた通りの振る舞いをしていれば、それで良いという話なのでしょうか。イエスは、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」（11節）と語っています。イエスが求めておられるのは、単なる「礼儀作法」ではなく、「へりくだる心」です。

とは言え、人は「高ぶる」ことを抑え切れません。あの人よりは正しく、マシで、偉いと思いたいし、そうでないと自分を保てないように思える時さえあります。だからこそ、イエスは私たちが自分で「低くなる」のではなく、神によって「低くされ」ていく存在だと表現したのです。私たちの「高ぶり」は、自分の計画や知恵や力ではどうにも支配できない現実を前に、自ずと打ち砕かれ、人間の分際を知らされ、「低くされ」ていきます。しかし、そのような時にこそ、神に委ねるしかない事実、いや、委ねることができる希望があることをイエスにおいて再確認し、私たちは逆に「高められ」ていくのです。

ある方の家で、「Christ isThe Head Of This House」（キリストは、この家の頭です）という壁掛けを見たことがあります。私たちではなく、主イエスこそが「頭」として上席に座っておられることを見据えるとき、私たちの生きているあらゆる時と場所は、神の支配や導きや報いのなかに置かれているという希望が見えてきます。

（文責：望月達朗牧師）